

「文化遺産の社会学」の「遺産」

「歴史的環境の社会学」とのすれ違いから考える

甲南女子大学 木村至聖

1 問題の所在

消費社会の裏で、モノを保存し価値づけようという、文化遺産「的」なもの、現象が広がっている。2010年代に入って毎年のように国内の物件の登録が決定している世界遺産は、「世界遺産暫定リスト」に記載された世界遺産「候補」のなかから推薦されており、この暫定リストに記載されるために、各地の自治体が名乗りをあげ、競争／狂騒に参加している。また、こうした世界遺産「候補の候補」を中心に、文化庁は2015年度より「日本遺産」の取り組みを開始した。さらに、こうした「遺産」という概念は、すでに世界遺産という「目標」を前提にしたものにとどまらず、民間や学会レベルでも「機械遺産」「夜景遺産」などが選定されるようになり、選定の主体や目的、基準も実に多様化してきている。

こうした実情を踏まえると、こんにち文化遺産とは、すでに文化遺産（文化財）であるものだけでなく、その指定や登録に向けた運動も含めた「プロセス」（現象）として考えられるべきだろう。そしてそのプロセスはもはや文化財保護法や世界遺産制度といった枠組みだけで説明できるものではなく、そもそも「遺産」とは何なのか、何を誰がなぜ「遺産」化するのか、「遺産」（化）を通して社会がいかに再編される（されてきた）のかが問われる段階になってきているといえる。

2 研究の現状

こうした現象をめぐる社会学的研究において、国内では2000年に出版された『歴史的環境の社会学』（片桐新自編、新曜社）と2002年に出版された『文化遺産の社会学』（荻野昌弘編、新曜社）は重要な準拠点としてたびたび参照されてきた。実際にこれらの研究の影響を概観するために、総合電子ジャーナルプラットフォーム『J-STAGE』および学術コンテンツデータベース『CiNii』で「歴史的環境の社会学」および「文化遺産の社会学」を参照している論文を検索すると、前者が合計で35件、後者が合計で25件ヒットし（ここでは書評は除いたが、学会報告の要旨などは含んでいる）、両者に言及している論文は2件のみであった。

ここからわかるのは、いずれの書籍も後続の研究に確かな影響を与えつつも、同時に参照されること・その立場や方法論の違いについて比較検討されることがほとんどなかったということである。もちろん、上記は論文のみを対象にしており、書籍や論集などでは両者の比較が踏まえられている可能性があるが、少なくとも個々の論文では多くの著者が「いずれか」を参照点として選び取っているのだと考えられる。

3 本報告の目的と方法

そこで本報告では、まず両書を再読することでそれぞれの目的・立場・方法論の異同を確認する。次に、いずれの書籍も編著であるため、後続の研究が実際に両書のなかのどの論考のどの部分を参照し、それに対してどのような立場をとっているかを詳細に分析する。その上で、両書が後続の研究に与えた影響を再確認するとともに、取りこぼされている論点、そして十分に論じられていないと考えられる両者の間の断層について考えることで、そこから今後の文化遺産／歴史的環境研究が学び取れる有意義な資源＝「遺産」とは何なのか検討してみたい。